

人間失格

太宰 治

はしがき

私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とでも言うべきであろうか、十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、（それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される）庭園の池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く？ けれども、鈍い人たち（つまり、美醜などに関心を持たぬ人たち）は、面白くも何とも無いような顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね」

といい加減なお世辞を言っても、まんざら空お世辞に聞えないくらいなの、謂わば通俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見えずぐ、

「なんて、いやな子供だ」

と頗る不快そうに呟き、毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほうり投げるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何と

も知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいないのだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固く握って立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑えるものではないのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺しわを寄せているだけなのである。「皺しわくちや坊ちゃん」とでも言いたくなるくらい、まことに奇妙な、そうして、どこかけがらわしく、へんにひとをムカムカさせる表情の写真であった。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、いちども無かった。

第二葉の写真の顔は、これはまた、びっくりするくらいひどく変貌へんぼうしていた。学生の姿である。高等学校時代の写真か、大学時代の写真か、はつきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。学生服を着て、胸のポケットから白いハンケチを覗のぞかせ、藤椅子とういすに腰かけて足を組み、そうして、やはり、笑っている。こんどの笑顔は、皺しわくちやの猿の笑いでなく、かなり巧みな微笑になっではいるが、しかし、人間の笑いと、どこやら違う。血の重さ、とでも言おうか、生命いのちの渋さ、とでも言おうか、そのような充実感じゅうじつかんは少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽毛のように軽く、ただ白紙一枚、そうして、笑っている。つ

まり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言っても足りない。軽薄と言っても足りない。ニヤケと言っても足りない。おしやれと言っても、もちろん足りない。しかも、よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談じみた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれまで、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かった。

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるでもう、としの頃がわからない。頭はいくぶん白髪はくぱつのようである。それが、ひどく汚い部屋へや（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちてゐるのが、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい火鉢ひばちに両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂いわわば、坐まって火鉢ひばちに両手をかざしながら、自然に死んでゐるような、まことにいまわしい、不吉なおいのする写真であった。奇怪なのは、それだけでない。その写真には、わりに顔が大きく写っていたので、私は、つくづくその顔の構造を調べる事が出来たのであるが、額は平凡、額の皺しわも平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎あごも、ああ、この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの顔を忘れてゐる。部屋の壁や、小さい火鉢ひばちは思い出す事が出来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、すつと霧消

して、どうしても思い出せない。画にならぬ顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。

あ、こんな顔だったのか、思い出した、というようなよここびさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真を再び見ても、思い出せない。そうして、ただもう不愉快、イライラして、つい眼をそむけたくなる。

所謂いわゆる「死相」というものにだって、もつと何か表情なり印象なりがあるものだろうに、人間のからだに駄馬だばの首でもくつつけたなら、こんな感じのものになるであろうか、とにかく、どここという事なく、見る者をして、ぞつとさせ、いやな気持ちにさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔を見た事が、やはり、いちども無かった。

人間失格

太宰 治

はしがき

私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とでも言うべきであろうか、十歳前後かと推定される頃の写真であつて、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、（それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される）庭園の池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く？ けれども、鈍い人たち（つまり、美醜などに関心を持たぬ人たち）は、面白くも何とも無いような顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね」

といい加減なお世辞を言つても、まんざら空お世辞に聞えないくらいなの、謂わば通俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見えずぐ、

「なんて、いやな子供だ」

と頗る不快そうに呟き、毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほうり投げるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何と

も知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだ
い、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいない
のだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固く握って
立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑えるもので
は無いのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺しわを寄
せているだけなのである。「皺しわくちや坊ちゃん」とでも言い
たくなるくらい、まことに奇妙な、そうして、どこかけが
らわしく、へんにひとをムカムカさせる表情の写真であつ
た。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、
いちども無かつた。

第二葉の写真の顔は、これはまた、びつくりするくらいひ
どく変貌へんぼうしていた。学生の姿である。高等学校時代の写真
か、大学時代の写真か、はつきりしないけれども、とにかく
く、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不
思議にも、生きている人間の感じはしなかつた。学生服を着
て、胸のポケットから白いハンケチを覗のぞかせ、藤椅子とういすに腰か
けて足を組み、そうして、やはり、笑っている。こんどの笑
顔は、皺しわくちやの猿の笑いでなく、かなり巧みな微笑になつ
てはいるが、しかし、人間の笑いと、どこやら違う。血の重
さ、とでも言おうか、生命いのちの渋さ、とでも言おうか、そのよ
うな充実感は少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽
毛のように軽く、ただ白紙一枚、そうして、笑っている。つ

まり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言つて
も足りない。軽薄と言つても足りない。ニヤケと言つても足
りない。おしやれと言つても、もちろん足りない。しかも、
よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談じ
みた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれま
で、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かつ
た。

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるでもう、
としの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようにである。そ
れが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちてい
るのが、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい
火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も
無い。謂わば、坐つて火鉢に両手をかざしながら、自然に死
んでいような、まことにいまわしい、不吉なおいのする
写真であつた。奇怪なのは、それだけでない。その写真に
は、わりに顔が大きく写っていたので、私は、つくづくその
顔の構造を調べる事が出来たのであるが、額は平凡、額の皺
も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎あごも、ああ、この顔
には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。
たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの
顔を忘れていた。部屋の壁や、小さい火鉢は思い出す事が出
来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、すつと霧消

して、どうしても思い出せない。画にならない
顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。

あ、こんな顔だつたのか、思い出した、というようなよろこ
びさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真
を再び見ても、思い出せない。そうして、ただもう不愉快、
イライラして、つい眼をそむけたくなる。

所謂「死相」というものにだつて、もつと何か表情なり印
象なりがあるものだろうに、人間のからだに駄馬の首でも
くつつけたなら、こんな感じのものになるであろうか、とに
かく、どこという事なく、見る者をして、ぞつとさせ、いや
な気持ちにさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔
を見た事が、やはり、いちども無かつた。

人間失格

太宰 治

はしがき

私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とても言うべきであろうか、十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、（それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される）庭園の池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く？ けれども、鈍い人たち（つまり、美醜などに関心を持たぬ人たち）は、面白くも何とも無いような顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね」

といい加減なお世辞を言っても、まんざら空お世辞に聞えないくらい、謂わば通俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見えずぐ、

「なんて、いやな子供だ」

と頗る不快そうに呟き、毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほうり投げるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何と

も知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだ
い、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいない
のだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固く握って
立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑えるもので
は無いのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺しわを寄
せているだけなのである。「皺しわくちや坊ちゃん」とでも言い
たくなるくらい、まことに奇妙な、そうして、どこかけが
らわしく、へんにひとをムカムカさせる表情の写真であっ
た。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、
いちども無かった。

第二葉の写真の顔は、これはまた、びっくりするくらいひ
どく変貌へんぼうしていた。学生の姿である。高等学校時代の写真
か、大学時代の写真か、はっきりしないけれども、とにかく
く、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不
思議にも、生きている人間の感じはしなかった。学生服を着
て、胸のポケットから白いハンケチを覗のぞかせ、藤椅子とういすに腰か
けて足を組み、そうして、やはり、笑っている。こんどの笑
顔は、皺しわくちやの猿の笑いではなく、かなり巧みな微笑になっ
てはいるが、しかし、人間の笑いと、どこやら違う。血の重
さ、とでも言おうか、生命いのちの渋さ、とでも言おうか、そのよ
うな充実感は少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽
毛のように軽く、ただ白紙一枚、そうして、笑っている。つ

して、どうしても思い出せない。画にならない
顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。
あ、こんな顔だったのか、思い出した、というようなよろこ
びさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真
を再び見ても、思い出せない。そうして、ただもう不愉快、
イライラして、つい眼をそむけなくなる。

所謂「死相」というものになって、もっと何か表情なり印
象なりがあるものだろうに、人間のからだに駄馬の首でも
くつつけたなら、こんな感じのものになるであろうか、とに
かく、どここという事なく、見る者をして、ぞっとさせ、いや
な気持ちにさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔
を見た事が、やはり、いちども無かった。

まり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言って
も足りない。軽薄と言っても足りない。ニヤケと言っても足
りない。おしやれと言っても、もちろん足りない。しかも、
よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談じ
みた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれま
で、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かつ
た。

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるでもう、
としの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようにである。そ
れが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちてい
るのが、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい
火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も
無い。謂わば、坐って火鉢に両手をかざしながら、自然に死
んでいるような、まことにいまわしい、不吉なおいのする
写真であった。奇怪なのは、それだけでない。その写真に
は、わりに顔が大きく写っていたので、私は、つくづくその
顔の構造を調べる事が出来たのであるが、額は平凡、額の皺
も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎あごも、ああ、この顔
には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。
たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの
顔を忘れていた。部屋の壁や、小さい火鉢は思い出す事が出
来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、すっと霧消

人間失格

太宰 治

はしがき

私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とても言うべきであろうか、十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、（それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される）庭園の池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く？ けれども、鈍い人たち（つまり、美醜などに関心を持たぬ人たち）は、面白くも何とも無いような顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね」

といい加減なお世辞を言っても、まんざら空お世辞に聞えないくらい、謂わば通俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見てすぐ、

「なんて、いやな子供だ」

と頗る不快そうに呟き、毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほり投げられるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何と

も知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいないのだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固く握って立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑えるものではないのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺を寄せているだけなのである。「皺くちや坊ちゃん」とでも言いたくなるくらいのも、まことに奇妙な、そうして、どこかけがらわしく、へんにひとをムカムカさせる表情の写真であった。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、いちども無かった。

第二葉の写真の顔は、これはまた、びっくりするくらいひどく変貌していた。学生の姿である。高等学校時代の写真か、大学時代の写真か、はっきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。学生服を着て、胸のポケットから白いハンケチを覗かせ、藤椅子に腰かけて足を組み、そうして、やはり、笑っている。こんどの笑顔は、皺くちやの猿の笑いでなく、かなり巧みな微笑になっているが、しかし、人間の笑いと、どこやら違う。血の重さ、とでも言おうか、生命の澁さ、とでも言おうか、そのような充実感は少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽毛のように軽く、ただ白紙一枚、そうして、笑っている。つ

まり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言っても足りない。軽薄と言っても足りない。ニヤケと言っても足りない。おしゃれと言っても、もちろん足りない。しかも、よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談じみた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれまで、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かった。

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるで、もう一つの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようにである。それが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちてゐるのが、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂わば、坐つて火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでゐるような、まことにいまわしい、不吉なおいのする写真であった。奇怪なのは、それだけでない。その写真には、わりに顔が大きく写っていたので、私は、つくづくその顔の構造を調べる事が出来たのであるが、私は、つくづくその顔も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎も、ああ、この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの顔を忘れてゐる。部屋の壁や、小さい火鉢は思い出す事が出来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、すつと霧消

して、どついても、何としても思い出せない。画にならない顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。あ、こんな顔だったのか、思い出した、というふうなよろこびさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真を再び見ても、思い出せない。そうして、ただもう不愉快、イライラして、つい眼をそむけたくなる。

所謂「死相」というものになつて、もつと何か表情なり印象なりがあるものだろうに、人間のからだに駄馬の首でもくつつけたなら、こんな感じのものになるであろうか、とにかく、どこという事なく、見る者をして、ぞつとさせ、いやな気持ちにさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔を見た事が、やはり、いちども無かった。

人間失格

太宰 治

はしがき

私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とても言うべきであろうか、十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、（それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される）庭園の池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く？ けれども、鈍い人たち（つまり、美醜などに関心を持たぬ人たち）は、面白くも何とも無いような顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね」

といい加減なお世辞を言っても、まんざら空お世辞に聞えないくらいいの、謂わば通俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見えず、

「なんて、いやな子供だ」

と頗る不快そうに呟き、毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほり投げられるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何と

も知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいないのだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固く握って立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑えるものではないのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺を寄せているだけなのである。「皺くちや坊ちゃん」とでも言いたくなるくらいのも、まことに奇妙な、そうして、どこかけがらわしく、へんにひとをムカムカさせる表情の写真であった。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、いちども無かった。

第二葉の写真の顔は、これはまた、びっくりするくらいひどく変貌していた。学生の姿である。高等学校時代の写真か、大学時代の写真か、はっきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。学生服を着て、胸のポケットから白いハンケチを覗かせ、藤椅子に腰かけて足を組み、そうして、やはり、笑っている。こんどの笑顔は、皺くちやの猿の笑いでなく、かなり巧みな微笑になっではいるが、しかし、人間の笑いと、どこやら違う。血の重さ、とでも言おうか、生命の渋さ、とでも言おうか、そのような充実感は少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽毛のように軽く、ただ白紙一枚、そうして、笑っている。つ

まり、一から十まで造り物の感じなのである。キザと言っても足りない。軽薄と言っても足りない。ニヤケと言っても足りない。おしゃれと言っても、もちろん足りない。しかも、よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談じみた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれまで、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かった。

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるで、もう一つの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようにである。それが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちてゐるのが、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂わば、坐って火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでいるような、まことにいまわしい、不吉なおいのする写真であった。奇怪なのは、それだけでない。その写真には、わりに顔が大きく写っていたので、私は、つくづくその顔の構造を調べる事が出来たのであるが、額は平凡、額の皺も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎も、ああ、この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの顔を忘れてゐる。部屋の壁や、小さい火鉢は思い出す事が出来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、すっと霧消

して、どついても、何としても思い出せない。画にならない顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。あ、こんな顔だったのか、思い出した、というふうなよろこびさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真を再び見ても、思い出せない。そうして、ただもう不愉快、イライラして、つい眼をそむけたくなる。

所謂「死相」というものになつて、もつと何か表情なり印象なりがあるものだろうに、人間のからだに駄馬の首でもくつつけたなら、こんな感じのものになるであろうか、とにかく、どこという事なく、見る者をして、ぞっとさせ、いやな気持ちにさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔を見た事が、やはり、いちども無かった。